

# 宋代の婚礼説について

緒方賢一

## Abstract

Late Imperial China (後期帝政中国) is a period rich in rituals (礼) codifying most of people's acts. This paper considers the intellectuals' (士大夫) discourses on the wedding ceremony in Song China (宋代中国). At that time, many intellectuals discussed and studied historical evidences and practices concerning rituals. Among them, the wedding ceremony stood as the most particular and important one since it brought two unrelated families together. Throughout the wedding ceremony, two families could strengthen their economic, political, and social ties, as well as extend the network of the clan.

I first look into the early sources and then focus on the official history and the discourse about the wedding ceremony in Song China. Finally, I compare and examine three intellectuals: Sima Guang (司馬光), Cheng Yi (程頤), Zhu Xi (朱熹), who attempted, through their comments, to establish a model of what true family should be in Song China.

**Keywords :** 宋代中国, 婚礼, 朱熹, 司馬光, 程頤

## 1. はじめに

近世中国（宋～清）において儒教的観念にのっとりた礼が社会規範としての機能を持っていたことは改めていうまでもない。数世紀にわたって、多くの知識人たちが礼をめぐる議論を交わし、考証を行い、実践してきた。ただ、一口に礼といっても、経学としての礼、国家儀礼としての礼、個人（または家族）が行う冠婚葬祭や日常の洒掃応対としての礼など様々なレベルがある。ここでは冠婚葬祭の中でも、特に婚礼に着目して考察してみたい。

婚礼は血縁のない他者同士がきわめて深い関係を取り結ぶ儀礼であり、他の冠礼・葬礼・祭礼が、基本的に一族の内部のみで行われるのとは性格を異にしている。婚礼を通して二つの家族は親類となり、互いに経済的・政治的・社会的に強く結びつき、宗族のネットワークを拡大することが可能になるのである。

唐代の貴族社会の崩壊を経て成立した宋朝が科挙制度を全面的に導入したことにより、知識人同士の交流が様々な局面において劇的に変化したことはつとに先学の指摘する通りである<sup>1)</sup>。また人的ネットワークの構築に婚姻が大きく関わっていたこともすでに歴史研究者によって指摘されている<sup>2)</sup>。こと宗法制度を重視する宋代にあって、婚姻は重要な選択を迫られる課題であ

る。よって婚礼という制度にも当時の士大夫は敏感にならざるを得なかったであろう。本稿では、宋代に書かれたいくつかの婚礼説を検討し、当時の知識人たちが婚礼というものをどう捉えていたか、また婚礼説からかいま見える家族観（または宗族観）を抽出してみたい。

宋代人が同時代において礼を実践しようとした場合、たちまちいくつかの問題が発生する。まず『儀礼』など古代の礼書が当時は失われており、完全なものでなくなっている。また実際に行われている礼が古礼と著しく異なる。さらに結婚しようとしている二つの家族の婚礼がそれぞれ食い違っている。実際の婚礼というものはその地域、その時代の風習の影響を強く受けるもので、それは現代と同様である。婚礼説を構築しようとする知識人たちはどのように当時の風習と折り合いを付けつつも普遍的な礼を目指したのであるか。

筆者はここ数年宋代を中心とする中国近世における家訓や善書といった民間における道德規範を著した言説を分析して、そこに書かれた概念の変遷や書物そのもののあり方の変化の追跡を行ってきた<sup>3)</sup>。本論考もその延長上にある。つまり唐宋変革を経て激変する社会にともなって否応なく変化を迫られる道德観（あるいは風俗観といってもよい）に対して、当時の人々がいかに対応したのかを婚礼の観点から見てみたいということである。

以下、婚礼に関する先行研究をいくつか紹介し、次に正史において婚礼がどのように扱われているかを概観する。その後、宋代の礼書において婚礼がいかように記述されているかを確認し、最後にその中でも宋代の代表的な婚礼説とみなしうる司馬光、程頤、朱熹の三人の説を比較検討してみたい。その際、式次第の順序に関してかなり細かな検討を行う。礼というのは結局は細部の集積に他ならず、個々の婚礼説の差異や礼テキスト制作者の思いはこの細部にこそ現れるのであり、煩を厭わず載せる次第である。

## 2. 宋代の婚礼に関する先行研究

宋代の冠婚葬祭の礼に関する研究、例えば「朱子家礼」に関する研究は、日本・中国・西洋まで含めると膨大な数に上る。しかし的を宋代の婚礼にしぼると、とたんに研究の蓄積は減少する。管見の限りでは、国内では以下に挙げる山根三芳氏と小島毅氏のもの確認できるだけである。いずれも専論ではなく、礼説及び家礼研究の一部として婚礼を扱っているに過ぎない。また海外においては、アメリカにおけるイーブリ氏、ド・ピー氏のもの、中国における王玉波氏のものなどが確認できる<sup>4)</sup>。イーブリ氏の研究は、宋代の説話集や都市繁盛記などを多数参照し、当時の婚礼の実態を描き出すことに重点が置かれており、その点において参照すべきことからは多いものの、知識人たちがどう対処したかについての記述は決して多くはない。ド・ピー氏の研究は、その著書の主に第一章において司馬光、程頤、朱熹を含む宋代の士大夫らの婚礼説を取り上げ検討を行っている<sup>5)</sup>。朱熹の礼説についての言及は従来の研究と大きな差異は見られないが、司馬光に関しては、「拜先霊」を取り上げてこれが彼の婚礼説の核心であると指摘し、程頤に関しては「親迎」において新郎が新婦側の廟に入る点、さらにその後新婦側の親族に面会する点について、「祖先との連続性を強調し、礼のユニットとして家族を再生産」する儀式であると述べるなど、その指摘の多くは示唆に富む。王氏の研究は古代から清代までの婚礼の変遷を追跡した労作である。氏も唐から宋にかけての社会および経済体制の劇的な変化により結

婚観も大きな影響を受けたと指摘している。具体的には男性側の私有財産の多寡や経済力が婚礼を左右する様になり、また煩瑣な式次第が敬遠される様になってきたと述べる。

・山根三芳『宋代礼説研究』（溪水社、1996年）

本書の第二章第三節「司馬光の『婚儀』説」において、『儀礼』『士昏礼』と、司馬光の『書儀』（及び朱熹の『家礼』）を比較し、司馬光が行った改編部分を指摘しつつ、その根本的理由について、「立論根拠を『儀礼』を中核とする礼経学的理念や諸説におきながらも、現実的な具体的実践を積極的に希求する立場から、実践可能な簡易な考え方・儀節に徹しようとする考え方」によるとする。

温公は、古礼を尊重し、礼経学を基盤として、その理念的（原則的）な儀礼は、あくまでも確保しながらも、実に実践可能な儀節を適切に整合して「婚儀」を構築したのである。儀節の簡略化を基本としながらも、原則的なものは具体的に継承詳述し、世俗的な俗礼であっても、人情の宜と時義に適したものは、積極的に儀節の中に組み込んだのである。この姿勢は、朱子が客観的礼俗を規定して「天理之節文、人事之儀則」（『論語』『学而集注』）と、表白した精神と軌を一にするものである。『家礼』は、『書儀』を前提として、一段と合理的簡略化を意図し、当代社会に実践すべき而も実践可能な最小限度の儀節を項目的に列挙したものである。（120頁）

また第三章第一節「二程子の礼節」（5）「婚礼説」では、程子の婚礼説について、原文を丹念に読み解き、司馬光や朱熹の礼節とも適宜比較して紹介している。ただし山根氏の意図は、内容の検討というよりは訳注作業にあるようで、その背景となる彼らの思想にまでは踏み込んで言及されていない。

・小島毅『中国近世における礼の言説』（東京大学出版会、1996年）

小島氏の研究は、近世の知識人たちが礼というものをどのように捉えていたかを、従来あった経学研究や礼がいかに実践されていたかを実際の礼に則して検証するといったものではなく、言説のレベルで考察するという画期的なものである。小島氏は該書の第二章「『家礼』の構造」において、『家礼』を分析し、新婦の輿入れから「廟見」に至る期間について朱熹が改編を行った箇所を検討、朱熹が宋代の家廟の実状や当時の習慣を優先させたと結論づける。従来は三ヶ月かけていた廟見の儀式を、輿入れの三日後に新婦が廟見すべきと朱熹は主張するが<sup>6)</sup>、その理由について、当時輿入れ当日に行われていた廟見を矯正し、また毎月行われる祖先祭祀に新婦が参加するのに間に合わせるため、と指摘する。

以上、『儀礼』と宋代の礼との関係について、上記二篇の論考が共に挙げている古代の礼を改編する理由を簡単にまとめると次のようになる。

一、『儀礼』の制作年代（と宋代人が認識していた）における身分制度と宋代（いわゆる士大夫社会）との齟齬。

二、礼の制度は時代の移り変わりに合わせて、その時々の人情に合わせて改められるべきだ

という認識の存在。

上記二つの研究は、宋代の婚礼のあるべき姿を当時の知識人がいかに捉えていたかを、文献の丹念な読解を通して明らかにしている。しかし筆者としては、「司馬光は現実を踏まえて『書儀』を執筆した」、「朱熹は現実を踏まえて『家礼』を執筆した」と、山根・小島両者が結論づけている点について多少の疑問を抱かざるを得ない。実際、司馬光・朱熹の書物に当たると、「時宜に合わせるべきだ」といったたぐいの言葉が散見される。しかし「現実」をふまえて書かれた彼らの礼説は、実際にはかなりの差異が生じている。これはなぜなのだろうか。司馬光と朱熹の生きた時代を鑑みるに、北宋と南宋とでは婚礼の実態が異なっていたのだろうか、そもそも地域的な差異があったのだろうか。そもそもそれぞれの理想とする礼観が異なっていたのか。両者とも現実に合わせてと言っているがどこまで合わせる気持ちがあったのか。等々の様々な疑問が湧いてくる。このような疑問を抱えつつ、以下婚礼説について筆者の検討したところを述べていくこととする。

### 3. 史書に見る婚礼

まずは正史に婚礼がどう記述されているか、いわば「公式」の婚礼の様式を確認したい。パーソナルな婚礼がどのようなものであったのかを後に検討するためには、とりあえず国によって公認された婚礼を先に見ておきたいというのがねらいである。

以下、参照としたのは『旧唐書』『新唐書』『宋史』『元典章』『明史』である。

『旧唐書』中の様々な記述、および『新唐書』巻十八「志・嘉礼」、「親王納妃」、「諸臣之子納婦」などから、皇家から諸臣、士庶に到るまでそれぞれ定まった形式の婚礼を実施していることが確認できる<sup>7)</sup>。例えば「其士庶有衣冠親迎者、亦時以服箱充馭。」(『旧唐書』巻四十五、志・輿服・衣服・侍臣服)、「士庶親迎之儀、備諸六礼、所以事舅姑、当須昏以為期、詰朝謁見」(『旧唐書』巻四十五、志・輿服・後記)などがその一例である。その他列伝においても「親迎(婿が新婦を迎えに行く儀式)」の礼を行っていたという記述を複数確認できる。いくつか例を挙げておきたい。「朱瑾は瑄の母弟であり、勇ましく善く戦う。乾符の末に、朝廷は將軍齊克讓を兗州節度とし、瑾はそれを襲名したいと思い、克讓に婚姻関係を結びたいと申し出た。親迎の日、瑾は勇士を選んで衛従させ、礼会の夜こっそりと抜けだし、克讓に迫り、城を占拠して彼の後釜となることを得た。<sup>8)</sup>」(『旧唐書』巻百八十二、朱瑾列伝)。「子の茂宗に詔が来て義章公主を娶ることになった。孝忠は妻を朝廷に送り、親迎の礼を執らせたところ、盛大な褒美を賜った。<sup>9)</sup>」(『新唐書』巻百四十八、張孝忠列伝)。

続いて宋代であるが、『宋史』巻百十一「嘉礼二、冊立皇后義、冊皇太子妃儀」や巻百十五「嘉礼二、親王納妃、品官婚礼、士庶人婚礼」の項を見ると、皇家から品官、士庶に至るまでの婚礼が詳細に記述されている。例えば品官婚礼は「品官婚礼。納采、問名、納吉、納成、請期、親迎、同牢、廟見、見舅姑、姑醴婦、盥饋、饗婦、送者、並如諸王以下婚。四品以下不用盥饋、饗婦礼。」と記述されている。また士庶人婚礼では、「親迎(新郎が新婦を迎えに行く儀礼)」について特に詳しく説明している。列伝では皇族の婚礼に関する記述が大半を占めており<sup>10)</sup>、士

大夫の婚礼はあまり取り上げられていない。列伝は個人の事績を記録するものなので、婚礼に関しての記述が少ないのも当然であるといえる。

『元史』礼楽志には婚礼に関する記述は見られない。ただ『元典章』卷三十には「婚礼」の一節が設けられており、「朱文公家礼」を元に制作した旨記されている。式次第も朱熹が定めた通りの順序に配列されている。冒頭に「至元八年（1271）九月」と記されていることから、南宋の理宗期の朱子学復権からそう遠くない時期のものであることがわかる。

最後に『明史』を見てみたい。卷五十五「嘉礼三」に婚礼が載せられており、「天子・皇太子・親王・公主・品官・庶人」の順に記述されている。冒頭の「天子納后儀」は「婚礼には六つのプロセスがあり、天子には親迎の礼だけがない。漢、晋以来、みな使節を遣って妃を迎えさせた。器物や文典はその時々によって増損した。明が興って、諸帝は即位した後に礼についての文書を作成させていた。正統七年に英宗が結婚する際に、初めて儀注を定めた<sup>11)</sup>」とある。また「皇太子納妃儀」には「歴代の制度は納后と同じ。隋唐以後に、始めて親迎を行った。天子は宮殿にて醮を行った。宋の時に始めて盥饋の礼を行い、明はこれにのっとっている。<sup>12)</sup>」という記述もある。ここからは明代には、宋代の婚礼を参考に礼が定められたことがうかがえる。さらに「庶人婚礼」に「『儀礼』では『婚礼、下達す』といい、また六礼の実践には、貴賤はない。『朱子家礼』には問名、納吉が無く、納采、納幣、請期だけである。洪武元年に制度を定める際にこれを用いた。<sup>13)</sup>」とあり、婚礼が洪武元年に至って『朱子家礼』にのっとって制定されたことが記されている。

#### 4. 礼書に見る婚礼のプロセス

続いて、本節では各礼書を用いて、婚礼の具体的なプロセスの差異を検討する。参照したテキストは、『儀礼』、『大唐開元礼』<sup>14)</sup>、『政和五礼新儀』<sup>15)</sup>、『司馬溫公書儀』<sup>16)</sup>、程頤礼説<sup>17)</sup>、朱熹『朱子家礼』<sup>18)</sup>である。

各礼書を見る前に婚礼の基本的なプロセスを紹介しておきたい。婚礼には、その基本たるべき「六礼」というものがある。先に引いた正史の婚礼に関する言説にも幾度か見えている。そのおおよその次第は以下の通りとなっている。

- ①「納采」：男性側から結婚を申し込み、女性の家に贈り物をする。
- ②「問名」：新郎側から使者を立て、新婦の姓名や生年月日をたずねる。
- ③「納吉」：嫁に迎えようとする女性の適否を占い、吉兆の結果を女性の家に報告し申し込む。
- ④「納幣」：（「納徵」に同じ）婚約が成立したしるしとして、男性の家から女性の家へ幣帛（絹織物）を贈る。
- ⑤「請期」：婚約の成立後、女性の家へ結婚の日取りを相談に行く。
- ⑥「親迎」：新郎が新婦の実家に自ら出向き、新婦を迎え入れる挨拶を行う。その後、車に乗せ新郎の家まで送っていく。

婚礼全体の流れは基本的に『儀礼』士昏礼に基づいている。これが後代に続く全ての婚礼の

ひな型となっている。『儀礼』の場合、後世の礼書のようにそれぞれの次第が次第として、例えば「納采」が「納采」という名を持つ1つのプロセスとしてはっきりと他のものと区切られて個別の名称を持つものとして記述がなされているわけではない。特に「親迎」以降、新婦が嫁入りしてからの儀式の区切りが判別し難い。そもそも区別を意識していたかどうかも定かではない。「納采」から始まり、「問名」、「納吉」、「納徴」、「請期」、「親迎」と続き、「親迎」以降は「翌日に舅姑にまみえる」、「婦に醴する（甘酒をふるまう）」、「婦が舅姑に盥饋する（舅姑に新婦が食事の給仕などを行う）」、「舅姑が婦に饗する（酒食をふるまう）」、「舅姑が送者に饗する（婦側の役人や子弟に絹を贈る）」となって基本的な記述は終わり、さらにその後にイレギュラーな儀礼として「舅姑がすでに没していた場合は三ヶ月経ってから奠菜する（没した舅姑に廟において面会する）」の一文が置かれる。

『大唐開元礼』の次第は次の通りである<sup>19)</sup>。ここでは天子を除く、皇家から六品以下の官に至るまで全て同様のプロセスをたどると記されている。「納采」、「問名」、「納吉」、「納徴」、「請期」、「親迎」、「見舅姑」、「盥饋」、「婚会（新郎側の一族が新婦側の一族と会食する儀式）」、「婦人礼会（女性の賓客をもてなす儀式）」、「饗丈夫送者」、「饗婦人送者」。「親迎」以降が『儀礼』とかなり異なっていることがわかる。「婚会」とは現代の披露宴のようなものと考えられる。

『政和五礼新儀』は北宋最後の皇帝徽宗の治世時に編纂されたものである<sup>20)</sup>。「庶人婚儀」とそれ以上の身分の次第とは内容が異なるので分けて紹介する。

まず「諸王以下昏儀」、「宗姫族姫嫁儀」、「品官婚儀」の次第は、「納采」、「問名」、「納吉」、「納成」、「請期」、「親迎」、「同牢（新婚の夫婦が一つの供え物を一緒に食べる儀式）」、「廟見（新婦が先祖の神位に面会する儀式）」、「見舅姑」、「醴婦」、「盥饋」、「饗婦」、「舅饗送者」、「姑饗婦人送者」となっている。「同牢」の儀式は先の『大唐開元礼』では「親迎」の中に組み込まれている。次に「庶人婚儀」の次第を見ると、「納采問名」、「納吉」、「納成請期」、「親迎」、「見祖禰（新婦が先祖の神位に面会する儀式）」、「見舅姑」、「醴婦」、「饗送者」となっている。「親迎」以前の次第は同じであるが、それ以降がかなり簡略化されていることがわかる。ただし四庫全書本巻百七十八「品官婚儀」は巻頭の式次第は「廟見」となっているが、十五葉目の本文では「見祖禰」に作り、神位は廟には置かれていない。またその後の巻百七十九「庶人婚儀」では、巻頭の式次第には「見祖禰」とあるものの、本文にそれに相当する記載は見られない。『四庫提要』には『政和五礼新儀』は、朱熹があまり評価しなかったこと、他の礼書が多く出たことなどから、この書があまり行われなくなり、それにともない書物自体も伝えられなくなったため欠損がひどいと記されており、この婚礼の箇所もそうした事情で錯綜した記述になっていると推測される。

次に司馬光の『温公書儀』（以下『書儀』）の紹介に移りたい。「納采」、「問名」、「納吉」、「納幣」、「請期」、「親迎」と基本の六礼の後に「壻見舅姑」、「壻見婦之父母」が置かれている。まず指摘しておきたいのは、「親迎」の式次第の中に、新郎の家に着いた新婦が影堂に案内された後、祖禰の前で「本日、壻が婦を迎え、祖禰にお目見えする云々」と読み上げて、新婦を祖先に紹介する儀式が追加されている点である。そしてこの文章の後に、司馬光は「いにしえにはこの礼はなかった。今は『先霊に拝す』と呼ばれて（行われているので）、廃することはできない<sup>21)</sup>」と注をつけている。また『儀礼』に書かれていた「廟見」について、「昔は廟見の礼があったが、今はこの『先霊に拝す』で先祖にお目通りしてしまっているのです、更にもう一度廟見は行わな

い<sup>22)</sup>』としている。そして最後に「婿見婦之父母」という次第が載せられている。これは具体的には「婦見舅姑」の次の日に、新郎が新婦の父母や親族に面会に行く儀式である。この儀式は、『儀礼』経文では、新郎が「親迎」できなかった場合のイレギュラーな行為として記述されているが、『書儀』では必ず行うべき礼として規定されている。またこの儀式は『大唐開元礼』には見られない。つまりこの「婿見婦之父母」という儀礼の必要性は『書儀』のころはじめて生まれたと考えられる。

続いて程頤の「礼説」は次の通りである<sup>23)</sup>。「納采」、「問名」、「納吉」、「納徴」、「請期」、「成婚」、「奠菜」と記されているが、最後の二つが他の礼書と異なっている。「成婚」の中には「親迎」、「婦見舅姑」、「婿見婦之父母」が含まれている。「婦見舅姑」、「婿見婦之父母」の日取りは『書儀』と同じである。またこの「成婚」の内には、新婦を迎えに行った婿が新婦側の廟に入り、神位に面会する記述もある。また継いで「見女之尊者、偏見女之東於東序」と新婦の一族に面会する場面も設定されている。これらは『書儀』には見られない程頤独自の説である。さらに新婦が「婦見舅姑」の後に「見属之尊者長者於東序」「幼者卑者、皆見於堂下」という記述も見られる。つまり婿が新婦を迎えに行った日に、嫁側の親類に会う場面が設定され、また新婦が婿の家に来た後、新郎側の一族に会う場が新たに設けられているのである。「奠菜」は、婦が舅姑に仕え、また新郎の家の祭祀に参加して三ヶ月後に廟前にて行われる儀式である<sup>24)</sup>。

最後に朱熹の『朱子家礼』を紹介する。「議昏」、「納采」、「納幣」、「親迎」、「婦見舅姑」、「廟見」、「婿見婦之父母」と記されているが、「六礼」のうち、「問名」、「納吉」、「請期」を削っている。この「問名」、「納吉」の削除について、朱熹は「納幣」の冒頭において「古礼には『問名』『納吉』というものがあつたが、今はどちらも行えない。『納采』、『納幣』だけを行うのは簡便を採つたのである。<sup>25)</sup>」とコメントを付けている。そして、これは先に挙げた小島氏論文も取り上げて詳細に検討していることであるが、朱熹は「廟見」を正式な儀礼として婚礼のプロセスの中に組み入れている。これは『書儀』及び程頤の礼説には見られないものである。朱熹は「古者三月而廟見。今以其太遠、改用三日」と述べ、従来は三ヶ月後に行われていた「廟見」を三日目に行うと述べる。また朱熹は、一日目「新婦は新郎に会う」、二日目「新婦は舅姑に会う」、三日目「新婦は廟見する」という一族への面会の順番を明確に規定する。司馬光、程頤の礼説からはこの順序に殊更こだわっている様子は見受けられず、これは朱熹独特のものと考えられる。さらに司馬光が風習となつてしまつていたので改めがたいと黙認する「先靈に拝す」を、朱熹は強く否定する。例えば『朱子文集』巻五十八「答宋深之」において、「廟見は必ずしも三ヶ月待つ必要はない。…中略…今、婦人は婿の家の門をくぐるとすぐ廟見して、しかも世を挙げて行われている。郷里の諸賢を見ると『左伝』の『先ず配して後に祖す<sup>26)</sup>』の説を深く信じているが、後世の紛々たる説など頼りとするには足りない。いにしえに従うのが正しいのだ。<sup>27)</sup>」と述べ、朱熹が生きていた時代に行われていた、婦人が嫁入りした後すぐに廟見するという習慣を批判する<sup>28)</sup>。この点に関しては後でもう一度触れたい。

加えて『家礼』では「納采」の前に「議昏」の一節を設け、(一)結婚の適齢について司馬光の説を援用しつつ述べ<sup>29)</sup>、(二)媒酌人を通じてお互いの連絡を取りそれから「納采」すべきことなどを説く。

「親迎」における婿が新婦の家に着いた時の次第であるが、朱熹は主人が婿を門内に引き入れ

て序事に上げ、婿は持ってきた鴈（雁）を新婦側に贈る儀式を行う、と記述する。『書儀』では婿は門の外で待機するとあり、程頤「礼説」では「親迎」の時には新郎が新婦側の廟に入るとある。三者の記述は著しく異なるが、これに関する朱熹のコメントはない。

そして『書儀』や程頤「礼説」にあった「婦見舅姑」および「壻見婦之父母」がここでも記述されている。文章はほぼ『書儀』の引用からなっている。特に『儀礼』ではイレギュラーだった「壻見婦之父母」という儀礼が、『書儀』から『朱子家礼』を経て完全に婚礼の一部となっている<sup>30)</sup>。

以上、長々と礼書における婚礼説の異同を見てきた。基本の六礼を踏まえながらも全体の流れとしては時代が下るにつれ簡略化の方に傾いていることがこれらから容易に見て取れる。また司馬光、程頤、朱熹の三人の礼説がかなり異なったものであること、そこにはこれらの礼説を著した彼らによる何らかの意図があるであろうこともわかってきた。次節においては婚礼説の差異をより詳しく検討し、三人が婚礼において何を重要と考えていたかを抽出してみたい。

## 5. 各々の婚礼説の差異

さて先に挙げた「廟見」について改めて考えてみたい。まず『政和五礼新儀』と『朱子家礼』とを比較すると、『政和五礼新儀』では、「親迎」を行った次の日に「廟見」を終え、続いてその日のうちに「見舅姑」を行うことになっている。一方、『朱子家礼』は「古人は下から上に行っていた、まず始めに夫婦の礼を行い、次の日に舅姑にまみえる。舅姑に仕えて三ヶ月に及ぶころ、舅姑からとくにお咎めがなくて、ようやく祭祀に参加できる<sup>31)</sup>」と述べる。つまり自分に近いところからさかのぼって、「夫婦」→「舅姑」→「先祖」の順に進むべきだと主張するのである。

さらに司馬光の『書儀』における「親迎」の際に新婦が輿入れの当日にすぐさま新郎の影堂（家廟）に拝するという儀式についても朱熹は批判している。

司馬光の場合、新婦は婿の家に着くとすぐに影堂に拝礼するというが、これは間違っている。古人の場合、嫁入りしたばかりではまだ「婦」になっておらず、翌日になってはじめて舅姑に会うことができたのである。つまり夫に受け入れてもらった後で、やっと舅姑に会うことができたのだ<sup>32)</sup>。  
（『語類』巻八九「昏」第七条）

これも朱熹の主張する「夫婦」→「舅姑」→「先祖」の順に沿っていないがための批判である。ただし『政和五礼新儀』にしても『書儀』にしても、この順序（「夫婦」→「先祖」→「舅姑」）に特に固執していることを示す言葉は見られない<sup>33)</sup>。先ほど見たように、司馬光は現行の風習を優先させて先祖への面会を先に置いたのである。それが朱熹に強く否定されたことによって、我々は朱熹からさかのぼって誰がどのように順序の優先順位を付けているかを意識するに至ったのである。『書儀』の後に編纂された『政和五礼新儀』も当時の風習であった「祖先→舅姑」のラインをそのまま受け入れた可能性が高い。ただし当時の風習を取り入れたということだけを強調する見方も些か単純に過ぎよう。『書儀』は「納采」の時に新郎と新婦が、それぞれ自宅の影堂において先祖に報告するという一節を設けている（『家礼』も同様）<sup>34)</sup>。この箇所司馬



光は注を付して、『儀礼』『士昏礼』には廟に報告するという文はないものの『春秋』には記述があるとして、「いにしへの婚姻は、みな先ず祖禰に報告していた。婚姻は家にとっての大事であって、この儀は祖先に伝えなければならないからである<sup>35)</sup>。」と述べている。つまり婚姻は家の大事である、よって祖禰に伝える義務があるというのである。

この一文を先のもので併せて考えると、「現在、祖先への面会が婚礼当日に行われている」、「このような家の大事は第一に祖先に報告すべきである」というこの二つの事柄は、司馬光の内において何の矛盾もなく結びついていたのではないだろうか。

朱熹は『語類』の中の問答において、程頤と司馬光の昏儀にはそれぞれ得失があり、「迎婦以前（婿が新婦を迎えに行くまで）は、温公の説が正しく、新婦が婿の家の門をくぐってからは、程頤の儀の方がよい。<sup>36)</sup>」（巻八九「昏」第4条）と評している。朱熹の考えを簡潔にまとめると以下ようになる。

『書儀』 「迎婦以前」：「親迎」の時に新郎は新婦の父にしか会わない。〔○〕

「婦入門以後」：新婦が新郎の家に着いてすぐに「廟見」する。〔×〕

程説 「迎婦以前」：「親迎」の時に新郎が新婦の一族に会う。〔×〕

「婦入門以後」：新婦はすぐに「廟見」しない。〔○〕

司馬光にしろ、程頤にしろ、もちろん宋代における家廟（影堂）の重要性を説いてはいる。特に程頤は当時、宗法制度が壊滅的な状態にあると考えていた<sup>37)</sup>。

宗子の法は廢れて、後世の族譜にはなお遺風が残っていた。族譜もまた廢れてしまつては、人は自分の来所を知ることができない。百年続く家もなく、家族をまとめるものもない。親であっても、その恩愛は輕薄になっている<sup>38)</sup>。

そのためにも「家必有廟<sup>39)</sup>」でなければならなかった。しかし「しかし今の士大夫の多くはこのことをゆるがせにして、親への孝行は一生懸命するものの、祖先に対しては輕薄になっている。<sup>40)</sup>」（同）というのが現状であった。前に見た『政和五礼新儀』でも「廟見」は「見舅姑」の前に置かれていた。だからといって家廟を輕視していることにはならないのはすでに指摘した通りである。

朱熹の場合は、自らの發案による「下→上」のラインを重要視したがために、先行する二者が批判されることとなった。そして後代、朱子学および『朱子家礼』が社会に定着していくに従って朱熹の考えの方が普及していったのであろう。

しかし「家廟」→「舅姑」の流れが消滅したわけでは決してない。例えば朱子学的な特徴を濃厚に持つといわれる明代初期に編纂された『大明集礼』『品官納婦<sup>41)</sup>』では、「親迎」→「廟見」→「見舅姑」の順に配列されている。

程頤や司馬光、そして朱熹が対峙していたのは当時の風俗（習俗）である。風俗という觀念については以前検討したことがある<sup>42)</sup>。理氣論や天や仁義礼智などに関する形而上的な議論と

は異なり、人々の日常生活や行動はこの風俗に強く規制される。風俗はその土地や人々の習慣によって形成されるため、様々な多様性を帯びており、また上からの統制をすり抜けるものでもある。司馬光は「国家の治乱は礼にもとづき、風俗の善悪は習いから由来している<sup>43)</sup>」と述べているが、朱熹の友人である呂祖謙は「礼は制定されたもの、俗は習慣より形成されたもの」と明確に述べ<sup>44)</sup>、程頤や朱熹もそれぞれ自分の生きた時代の風俗を批判しつつ礼の重要性を強調した。礼は日常生活の規範として働きつつも、その時々々の風俗の影響を受けて変化していくものであり、それは『礼記』「祭器」にも「礼、時為大」という言葉で表現されている。朱熹などはこのような場合、「大本」さえしっかり守っていれば、末節は変わっていてもいいのだと説明する<sup>45)</sup>。「大本」とは「古礼に存していた礼の本質」を指す。古礼も今となつては繁雑すぎて実践できないので、その本質部分だけでも継承すべきだと主張するわけである。

ここで宋代の知識人達が攻撃していた当時の婚礼とはどのようなものであったかを少しだけ見ておきたい。北宋の都汴京の繁盛記である『東京夢華録』と南宋の都臨安の繁盛記である『夢梁録』を参照した<sup>46)</sup>。まず『東京夢華録』に見る「親迎」の場面である。

嫁迎えの日になると、婿方では、車か花を飾った檐子を用意し、迎客をやって、嫁方の家の門まで迎えに行かせる。嫁方では迎客をもてなし、反物を贈る。さて「催粧」の音楽を奏して、嫁は乗物に乗りこむが、供人は一向に立とうともせず、がやがやと御祝儀をねだる。これを「起檐子」という。祝儀をやると、やっと出発する。迎客の方は先に婿方の門まで帰っており、花嫁が到着すると、その供人と婿方の用人たちが御祝儀と引出物をねだる。花嫁が乗物をおりると、陰陽師が枘のなかに穀物・銭・果物・藁たばなどを入れたのを持って、呪文をととなえながら門に向かって撒く。子供達は我れ勝ちにそれを拾う。……（入矢義高・梅原郁訳）

花などで飾り立てること、音楽を演奏することなどの華やかな演出は司馬光や朱熹等に批判されていることがらである。新婦の出発や到着を御祝儀をねだって邪魔したり、陰陽師がお払いしたりすることなども礼書には当然一言も書かれていない。『夢梁録』の方にも詳細な婚礼の描写があるが一部だけ紹介したい。「親迎」の翌日以降の様子である。

二人が枕を交わし畢ると、仲人が迎えに来て、座敷にきて、人々に挨拶する儀礼が行われる。次に親属・友人たちが慶賀する。また母方の舅姑たちに目通りする。両方の親属が新しい好誼を通じ合うと、祝宴となる。…中略…新郎新婦は、三日あるいは七日目か九日目に、女の家に向って拝門の礼を行う。嫁の実家では盛大な宴を張って新郎を款待し、会郎と名づける。また祝賀の贈物をその婿に与える。礼が畢ると、女の家は楽隊を用意し婿を屋敷に送り返す。女の家ではあるいは九日以内に、厨をつれて婿の家に向き、酒宴を催したりもし、これを嬖女会という。（梅原郁訳）

ここでは両家交えての大宴会が催されている。その数日後に新郎と新婦の二人が嫁の家を訪ねて、そこでも宴会が行われるというのも、今まで見てきた礼説に全く登場しない光景である。

それ以外にも新郎新婦がお互いの頭髪を結びつけるという風習があったり、婚礼の間にご馳走や豪華な贈り物が何度も双方を行き交う。この両書に記述されている婚礼はおそらく一般的に広く行われていたものであるからこそ、こうやって採録されたのであろう。これが当時行われていたスタンダードな婚礼だとしたら、司馬光、程頤、朱熹が想定している俗礼ともかなり食い違っている。ここでさらに当時の俗礼について詳細に紹介し、知識人らの理想とする礼との差異を検討すべきであるが、実は婚礼の実際についての詳細な描写は上記のもの以外にほとんど見ることができないというのが現状である。日常の出来事は記録されないからである。当時行われていた婚礼について言及がなされるのは、朱熹ら知識人が批判している文言の中や、また婚礼の次第について何か問題が持ち上がりそれに関する議論が起きた時くらいである<sup>47)</sup>。

朱熹も礼の「大本」が全く失われている状態を目の当たりにしている。朱熹が同安県の主簿であった時、その地では婚姻の礼が全く行われておらず、貧富に関わらず昔からの因習によって結婚が行われていることを非常に憂い、『政和五礼新儀』にのっとってきちんとした礼が施行されるよう役所に申請している<sup>48)</sup>。程子の門人であった呂大臨も「最近の俗世間では六礼が多く廃され、貨財が行き交い、婿は花で衣服や冠を飾り、婦は声楽で迎え導く、このような下品で愚かなことが、あらゆるところで行われている<sup>49)</sup>」と歎いている。だからこそ、彼らは古礼に則り、先人の婚礼に関する記述を吟味して、自らの理想とする婚礼規範を書き著し、正しい婚礼の次第を伝えようとつとめたのである。

## 6. 結語

まずわれわれを含めて後代の人間は、朱熹が、司馬光『書儀』と程頤の礼説を参考にして『家礼』を作り上げたという事実から、ついでに「司馬光+程頤→朱熹」という図式を描き出しがちである。そこでは司馬光も程頤も朱熹の『朱子家礼』を完成させるための一要素となってしまっている。しかし司馬光は当然のことながら朱熹の礼説など知るはずもなく、自身は当時の世相と格闘して独自の礼説を紡ぎ上げたのであり、程頤においてもそれは同様である。

個々の礼説を今一度見直してみると、司馬光の『書儀』では、まず舅姑よりも影堂が優先されるべきだということが示された。当時の風習がそのようなものであったとコメントが付けられていたが、家の大事は何よりもまず祖先に報告すべきものだからだと司馬光が考えていたからであろう。程頤「婚礼」は、婿は新婦の家では廟で新婦の祖先に面会し、また新婦の一族にも面会する。新婦も婿の家に到着した次の日に婿側の一族と面会する描写がある。ここからは程頤が、家廟もさることながら、まず現実に生きているそれぞれの一族との面会も重要であると考えていたことがわかる。他方、朱熹は「夫婦」→「舅姑」→「先祖」の順序の遵守を強く主張した。この順序は確かに『儀礼』と同じ流れのものである。朱熹もそれを守ろうとしたということ是可以する。しかし、朱熹は四書や『孝経』などの経書に容赦なく手を加えて、編集する人間であり、婚礼の前半部の六礼の「問名」、「納吉」も必要ないとあっさり削除した人間である。自らそうすべき何らかの必然性があったからこそ、「夫婦」→「舅姑」→「先祖」を主張したに違いない。しかし朱熹の言説の中にそれを裏付ける言葉は「従下做上」以外は残念ながら見つかっていない。もちろん、まず夫婦関係をしっかりとしたものにして、それから舅姑に

まみえて仕え、舅姑のお墨付きを得てから、一族の繁栄を左右する祖先に面会するというもつともな理由がありはするのであるが。

『礼記』『昏義』の冒頭に「婚礼は二姓の間によい関係を築き、それによって上は宗廟に仕え、下は後世を絶やさないようにしようとするものである<sup>50)</sup>」と記されているように、婚礼とは二家族の関係をいかにして緊密に構築し、お互いの永続を確固としたものにするかに心を砕くものであった。婚礼説はそれが如実に現れる言説空間である。朱熹にしても司馬光や程頤にしても、礼を改編する場合には例外なく「古代の礼は、今は受け入れられないので、『根本』は変えずに『末節』を実状に合わせてゆく」という論理を用いている<sup>51)</sup>。しかし、以上のようにそれぞれの著した婚礼説を子細に検討してみると、各自が何を「根本」と考え、何を「末節」と考えているかに関してさほど時代を隔てていない者同士であっても認識に違いのあることが確認できた。これらの認識の食い違いが何に起因するのかについては現在のところ彼らの言葉の中からは明解にし難く今後の課題としたい。冒頭でも述べたように、宋代は社会が激変している時代であった。その中で礼制も危機を迎えていた。儒者にとって礼制の崩壊は社会そのものの崩壊に他ならない。彼らを含めた宋代の儒者たちはその立て直し・再編制に全力を傾けた。祖先・親子・二つの家族の利害が衝突する婚礼とは、かような宋代の現実が如実に反映する場であり、今後とも引き続き考察を行っていききたい。また婚礼説を中心に冠礼、葬礼、祭礼とも関連づけて、より多くの時代の複数の礼説に関して、さらに詳細な礼説の体系化を試みてみたい。

## 注

- 1) 平田茂樹「宋代の朋党形成の契機について」『宋代史研究会研究報告第六集 宋代社会のネットワーク』, 汲古書院, 1998年
- 2) 岡元司「南宋期科挙の試官をめぐる地域性」『宋代史研究会研究報告第六集 宋代社会のネットワーク』, 汲古書院, 1998年
- 3) 「家訓に見る宋代士人の日常倫理」『宋代史研究会研究報告第七集 宋代人の認識 一相互性と日常空間一』(汲古書院, 2001年), 「葉夢得の善行一家訓を導きとして」(『中国学志』豫号, 2001年), 「『省心雜言』と善人一宋代士大夫における日常道徳の担い手一」(『大谷学報』第84巻第4号, 2002年), 「『太上感應篇』の思想的諸特徴」(『文藝論叢』第62号), 「陰徳の觀念史」(『文藝論叢』第68号, 2007年), 「『編集』という名の思想—劉清之の『戒子通録』をめぐる—」(『立命館言語文化研究』第21巻3号)。
- 4) Patricia Buckley Ebrey *The Inner Quarters: Marriage and the Lives of Chinese Women in the Sung Period* University of California Press, 1993年, Christian De Pee *The Writing of Weddings in Middle-Period China: Text and Ritual Practice in the Eighth Through Fourteenth Centuries* Suny Press, 2007年, 王玉波「中国婚礼的産生与演变」『歴史研究』1990年, 第4期
- 5) De pee, pp.55-81に詳しい。
- 6) イーブリ氏も同様の指摘をしているが、その理由に関しての言及はない。Ebrey (1993), pp93
- 7) 『旧唐書』の「志」には「嘉礼」の項目が立てられていない。
- 8) 「朱瑾、瑄之母弟、驍果善戰。初乾符末、朝廷以將軍齊克讓為兗州節度、瑾將襲取之、乃求婚於克讓。及親迎、瑾選勇士衛從、禮會之夜竊發、逐克讓、遂據城稱留後。」
- 9) 「詔其子茂宗尚義章公主、孝忠遣妻入朝、執親迎禮、賞賚甚厚。」
- 10) 『朱子文集』卷六十九「趙婿親迎礼大略」では、皇家の親迎の礼について次第を詳しく記している。
- 11) 「婚礼有六、天子惟無親迎礼。漢晋以来、皆遣使持節、奉迎、其礼物儀文、各以時損益。明興、諸帝皆即位後行冊立礼。正統七年、英宗大婚、始定儀注。」

## 宋代の婚礼説について（緒方）

- 12) 「歴代之制与納后同。隋唐以後，始親迎，天子臨軒醮成。宋始行盥饋礼，明因之」
- 13) 「礼云，婚礼下達，則六礼之行，無貴賤一也。『朱子家礼』無問名，納吉，止納采，納幣，請期。洪武元年定制用之。」
- 14) 文淵閣四庫全書所収。
- 15) 文淵閣四庫全書所収。
- 16) 百部叢書集成・学津討原所収の『温公書儀』を用いた。
- 17) 『二程集』『河南程氏文集』卷十（中華書局，1981年）に所収。
- 18) 『朱子全書』（上海古籍出版社，2010年）所収のものを用いた。
- 19) 「嘉礼」のうち，卷一百二十三～一百二十五が「昏礼」に相当。品官によって「三品以上婚」，「四品五品婚」，「六品以下婚」の三つに分けられる。身につける服や供え物の数は身分によって異なる。
- 20) 「嘉礼」のうち，卷一百六十六～一百七十九が「昏礼」に相当する。儀式の内容は官位及び性別によって以下の八つに分けられる。「納皇后儀」，「皇太子納妃儀」，「皇子納夫人儀」，「帝姬降嫁儀」，「諸王以下昏儀」，「宗姬族姬嫁儀」，「品官婚儀」，「庶人婚儀」。
- 21) 「古無此礼。今謂之拜先靈。亦不可廢也。」
- 22) 「古有三月廟見之礼。今已拜先靈，更不行。」
- 23) この程頤の礼に関する言説は，ボリュームが一千一百字程度の非常にコンパクトなものである。また独立した一冊の書物としてではなく文集に採録された形で流通したものであって，その点では礼書として扱うにはふさわしくないかもしれない。ただ『朱子家礼』成立に大きな影響を及ぼしているという事情を鑑みれば軽視できない。
- 24) 前述したが，ド・ピー氏も同様の事柄を指摘している。（De Pee, pp.67）
- 25) 「古礼有問名，納吉。今不能尽用，止用納采納幣，以從簡便。」
- 26) 『左伝』隱公八年
- 27) 「廟見不必候三月，…中略…今婦人入門即廟見，蓋舉世行之。近見鄉里諸賢頗信左氏先配後祖之説，豈後世紛紛之言不足拠，莫若從古為正否。」
- 28) また『朱子文集』卷六十三「答郭子從」においても，郭の「郷人多先廟見舅姑，然後配，不知如何」という問いに対して，「不是。古人必三日廟見，謂必宜其家中，夫婦已定意思，然後可以廟見。成礼之明日，便当見舅姑」と説く。
- 29) 『温公書儀』卷三「婚儀上」冒頭には「男子年十六至三十，女子十四至二十。身及主婚者，無期以上喪皆可成婚。必先使媒氏往來通言俟女氏許之，然後遣使者納采」の一文がある。
- 30) 「朱子家礼」を採用した『元典章』にもこの「婿見婦之父母」は記述されている。
- 31) 「古人是從下做上，其初是行夫婦礼，次日方見舅姑。服事舅姑已及三月，不得罪於舅姑，方得奉祭祀。」（『語類』卷八九「昏」第六條）
- 32) 「司馬礼却説，婦入門即拜影堂，這又不是。古人初未成婦，次日方見舅姑。蓋先得於夫，方可見舅姑。到兩三月得舅姑意了，舅姑方令見祖廟。」
- 33) また司馬光の文集も確認したが，婚礼に関する彼の言説は特に見られない。
- 34) 程頤「礼説」には見られない。
- 35) 「古之婚姻，皆先告於祖禰也。夫婚姻家之大事，其儀不可不告。」
- 36) 「迎婦以前，温公底是，婦入門以後，程儀是。」
- 37) 司馬光の影堂については吾妻重二氏の詳細な論考がある。吾妻重二『朱熹「家礼」の版本と思想に関する実証的研究（補訂版）』第二章「宋代の家廟と祖先祭祀」73-77頁
- 38) 「宗子法廢，後世譜牒，尚有遺風。譜牒又廢，人家不知來處，無百年之家，骨肉無統，雖至親，恩亦薄。」（『河南程氏遺書』卷十五「伊川先生語一」）
- 39) 『河南程氏遺書』卷十八「伊川先生語四」
- 40) 「今士大夫家多忽此，厚於奉養而薄於祖先。」

- 41) 『大明会典』巻六十九、礼部二十八「婚礼五」。ただしその直後の「庶人納婦」では、『朱子家礼』に言及しつつ「見舅姑」→「見祖禰」の順になっている。
- 42) 「家訓に見る宋代士人の日常倫理」『宋代史研究会研究報告第七集 宋代人の認識 一相互性と日常空間一』（汲古書院、2001年）を参照されたい。
- 43) 「謹習疏」『司馬光集』巻二十二
- 44) 『家範』巻一「宗法」。
- 45) 『語類』巻八十四・第八条などを参照。
- 46) 『東京夢華録』は入矢義高・梅原郁氏の訳注（岩波書店、1983年）を、『夢梁録』は梅原郁氏の訳注（平凡社、東洋文庫、2000年）を引いた。
- 47) 例えば『清波雜誌』（宋 周輝撰）の「元祐大昏」（巻一）には、官家において婚礼に音楽を用いるかどうかの事前に議論されるという記述が見られる。
- 48) 『朱子文集』巻二十「申嚴婚礼状」
- 49) 「近俗六礼多廢，貨財相交，婿或以花飾衣冠，婦或以声楽迎導，猥儀鄙事，無所不為。」『藍田呂氏遺著輯校』（中華書局、1993年）所収「呂氏郷約郷儀」
- 50) 「昏礼者，将合二姓之好，上以事宗廟，而下以継後世也。」
- 51) 程頤は「礼之本，出於民之情，聖人因而道之耳。礼之器，出於民之俗，聖人因而節文之耳。聖人復出，必因今之衣服器用而為之節文。其所謂貴本而親用者，亦在時王斟酌損益之耳」（『程氏遺書』巻二十五）と述べている。